

〈世界〉の縮図としてのフットボール

札幌大学総合研究 第9号 (2017年3月)

〈講演〉

〈世界〉の縮図としてのフットボール

西村 雄一

司会者：みなさま、今日は札幌大学総合研究所講演会にお越しいただきありがとうございます。本日の講演会は、2010・2014 FIFA ワールドカップレフェリーの西村雄一さんを講師としてお迎えし、〈世界〉の縮図としてのフットボールと題しまして、ご講演いただきます。

最もグローバル化した文化としてのフットボールにおいて、ワールドカップで審判を務められるなど、世界のサッカーに触れられてきた経験から、世界レベルのフットボールはもちろんのこと、フットボールを通じて見えてくる〈世界〉について、独自の視点で語っていただきたいと考えています。

ここでいうところの〈世界〉は、いわゆる国際試合に出場している国や地域としての世界、それにまつわる世界情勢、代表選手やサポーターが背負っている〈国〉でもあります。また、唯一選手以外でピッチに立つ審判だからこそ見える世界もありましょう。

こうした多様な世界観を想定して、フットボールという窓を通して見えてくる〈世界〉を共有することで、広い視野と意欲を培うきっかけとなってほしいと期待しています。

それでは、西村さん、よろしく願いいたします。

西村：みなさんこんばんは。西村雄一です。今日はお招きいただき、ありがとうございます。お話しできることを楽しみにしておりました。どうぞよろしく願いいたします。

司会者：今日は、対談形式のような形で進めさせていただければと思っています。こちらに座っていただけますでしょうか。



それでは、よろしくお願いします。

当然、みなさんご承知のように西村さんは、ワールドカップをはじめとする国際的な大舞台で笛を吹かれ、活躍されている審判員の第一人者ですので、西村さんならではの世界観をお話ししていただければなと思っています。

西村：はい。ではその前に、ぜひ皆さんに手に取って見ていただきたいと思い、持ってきたものがありますので、説明させてください。

こちらに、2010年の南アフリカ大会では決勝戦を担当したのですが、その時の金メダルを持ってきました。実は、審判員にもメダルが授与されます。そして、向かって左側のは、2014年のブラジル大会で3位決定戦を担当しましたので、そのときの銅メダルです。ぜひご覧ください。

それから、両大会で使用されたボールも持ってきました。いまからこのボールを会場の皆さんに回しますので手にとってご覧ください。2014年のワールドカップ観てました？ だれか好きな選手はいますか？「ネイマール？」はい、ネイマール蹴っていますよ。写真を撮っても大丈夫です。ちなみに、ワールドカップのボールには対戦相手を書いてあります。たとえば2010年のボールでしたら、ブラジル対オランダ、こっち側はブラジル対クロアチアと書いてあります。



司会者：実際にワールドカップ大会で使用されたボールに触れられるなんて貴重ですね。それでは、お話を聴きながらになりますが、順に回していただきます。

さて、あらためて始めさせていただきますが、まずは西村さんのご経歴からおうかがいしたいのですけれども。

西村：はい。では、私がレフェリーになろうと思ったきっかけからお話しします。今日は子供さんたちがこんなに来てくれていると思っていませんでしたが、みなさんたちと同じように、小さいころからサッカーをプレーしていて、サッカーが大好きでした。高校、専門学校と進学してもサッカーを続けていました。学生の頃は審判になろうとは思っていませんでした。ところがコーチの立場になって、試合で審判の判定ミスが起きて、悔しがる子どもたちの姿を見て、「これ、なんか違うな」と思い、「自分で審判をやってみよう」と思ったのです。難しいのかもしれないけれど、選手のためにやってみようと思い始めたのがきっかけです。

その後、情報処理の専門学校に通っていたので、パソコン関連の販売会社へ就職をしています。10年間、営業マンとして働きました。そこで働いていた経験がなければ、今の自分のレフェリングスタイルはできていないので、とても大切な期間でした。そして、プロのレフェリーに転職した後は、みなさんご存じの通り、国内外の様々な大会に参加しています。

今自分がやっていることは、選手が夢をかなえることの手助けをしていると思っています。海外で活躍している日本人選手も、以前私とJリーグの舞台で一緒のピッチに立っているんですよ。そこで素晴らしい実績や、パフォーマンスを示したことで海外の舞台で

活躍しています。彼らは、1個1個夢をかなえていくのですけれど、そのひとつの試合に関わる私が、何か間違えれば彼らの運命を変えることになるかもしれません。この責任が審判としての本当に大切なことだと思います。私と一緒に試合で選手がいいパフォーマンスができるようなサポートができれば、彼らはどんどん夢をかなえていってくれます。これが実際に同じピッチに立つレフェリーにしかできないサポートで、やはり審判を続けている一番の魅力であり醍醐味ですね。

さて、みなさん、審判員って日本にどのくらいいるかご存じですか？あんまり想像つかないでしょうか？

この中で審判の資格を持っている人は手を挙げていただけますか？1人、2人、3人、けっこういますよね。ありがとうございます。実は日本で登録されているレフェリーは約25万人います。よくみなさんが見ているJリーグの試合などは1級審判員が担当していて、だいたい200名前後です。そして国際審判員が20名くらい。それから私のようにプロフェッショナルレフェリー、つまりJリーグの審判をすることで生計を立てている人というのは日本に15人です。

司会者：サッカー選手がプロになるより厳しい世界とも言えそうですね。

西村：そうですね。もしかしたら難しい部分があるかもしれないですね。

審判員は、4級から3級、3級から2級としっかりステップアップしていく教育制度が整っています。時には「レフェリーの誤審じゃないか！どうなっているんだ！」と世間を騒がせることもあります。突然出てきてレフェリーをやっているわけではなく、こういった教育過程をしっかりと通過して、努力した人達がレフェリーを担当しているのです。なかなか世間の皆様には知られていない部分ですけど、かなり努力を積んでいるのです。それでも、ミスがあるので、そこところは常に反省し改善しなければなりません。



次に、国際審判員をしていた頃のお話しをします。まずは、これは私が行った国際大会、FIFA 大会の一覧です。幸運なことにすべてのカテゴリーの大会を経験することができました。アンダー17、アンダー21、それから、クラブワールドカップ、オリンピック、そして、ワールドカップ。すべてのカテゴリーの大会に参加するというのは、運がないと参加できないので、とても貴重な機会となりました。そして、どの年代のサッカーでも対応できる実力を身につけなければなりません。とても大変でしたけれども、すごく力がついたと思っています。

さてその中で、ほとんどの大会において、大会最終日まで参加できました。唯一、ロンドンオリンピックだけ予選リーグを担当して帰ってきています。これには理由があるのですが、先生、理由お分かりになりますか？

司会者：すぐには思いつきませんが、どうしてですか？

西村：ロンドンオリンピックでは、日本男子サッカーは4位でした。4位になるということは、私は大会最後まで参加できません。なぜなら、自分の国が決勝トーナメントに進出すると、公平・公正を保つために当該国の審判員は試合を担当できなくなるのです。

司会者：なるほど。

ということは、西村さんが決勝に残っているということは、日本代表が勝ち残っていなかった…。

西村：そうなんです。だから、これはあまりよくないんです。本来ここには、日本チームがいなければならないのです。

司会者：選手たちの活躍が一番期待されるわけですからね。

さて、西村さんがすべてのカテゴリーの試合を担当されてきたということがあらためて確認できました。そして、サッカーの審判員が25万分人もいて、そのなかでプロの審判員は15人、そこまで狭き門だとまでだとは思っていませんでしたけれど、西村さんはその頂点にいらっしゃるわけですね。ちょうど2016年度も受賞されるとのニュースを見ましたが、2009年から今年までJリーグの優秀主審賞を受賞されています。あらためて、本当に日本のトップにいらっしゃる方をお招きできた喜びを感じています。

そういうサッカー審判員という仕事をされていると、時には世間の批判にさらされることもあったりするわけですね。苦労や難しさもあるのでしょうかけれども、審判でなければ味わえない興奮とか、おもしろさもあるのではないのでしょうか。そのあたりを次にうかがわせていただけますか。

西村：わかりました。さきほど審判の教育制度に触れましたけれども、それではどのようにしてトレーニングしているのか、お伝えしたいと思います。

サッカーの主審は、基本的にピッチを斜めに走っているというのは、ご存じでしょうか？あんまり知られていないかもしれないですね。アシスタントレフェリーの二人と、効率よく広いピッチをくまなく見られるように、協力体制を築いています。



近年のサッカーは、あまりにも判断に難しいシーンが多くなってきているので、さらにレフェリーを増やすことになりました。いまトライアル中ですが、それぞれのゴール横に審判員が1人ずつ増えます。やはり、きわどいゴールの判定や、ペナルティエリアの付近のシーンを正しく判定することが一番難しいところです。これをどうやって精度を高めていけるのかが、私たちの永遠のテーマとなっています。

それから、レフェリーにはフィットネステストが課されています。選手と一緒にピッチに立つためには必ず突破しなくてはならない体力テストです。たとえば、主審のテストでは、40メートルを6秒以下で1分30秒毎に6回走るというスプリントテストがあります。そして、それが終わったら150メートルを30秒で走り、50メートルを30秒で歩きます。そしてまた150メートルを30秒で走って、50メートルを30秒で歩くということを、20回繰り返し返します。陸上競技のトラックを10周するということになりますね。これをクリアしなければ選手と一緒に同じピッチに立てません。

司会者：そのタイム内に走れないとどうなるのですか？

西村：タイム内で走れなければ、審判員の資格停止になりますね。ゲームを担当できなくなってしまいます。ちなみに、タイム内で走るだけでなく、ハートレートモニターを付けて心拍数なども計測していますので、心肺機能が耐えられるかどうか、スピードが出ているかどうかなどをチェックされています。それでは、テストの様子ので映像があるのでご覧ください。世界中でこのテストをおこなっています。このように体調を整えないと、レフェリーは選手をサポートすることができないのです。副審もテスト項目に若干の違いがありますが同様におこなっています。

司会者：サッカーの審判員は、テストもそうでしょうけれども、審判を務めるためにこうしたトレーニングをされているということですね。

西村：そうですね。それから、女性審判員も活躍しています。女性審判員も求められるフィジカル的な内容は変わりませんから、女子の基準や種目で同様にテストが課されています。このような体力テストをクリアしたレフェリーたちが、選手と一緒にピッチに立っています。

次に、私の考える審判員の使命についてお話ししたいと思います。

世界中の方々がサッカーを観てとても楽しんでいただいていると思います。それはなぜかと言うと、サッカーから得られる感動を楽しみにしているのです。プレーしている人は自分のプレーに感動したいし、観ている皆様はさすがが楽しいプレーや、一生懸命やっている姿を見て感動している。その感動をつくれるのは選手の方々しかいません。選手は全力のプレーでみなさんを魅了している。監督やコーチなどは、その選手たちをチームとして支えています。その選手や監督やスタッフの方々が、たくさん輝けるよう支えることが、レフェリーに課された使命ですね。私たちの努力のすべては選手のためです。ですから体力面だけでなく様々な努力をしないといけないと思っています。

そして、もちろんジャッジすること、これがレフェリーの役割であることは間違いありません。そのジャッジするための基本となる考えかたについて、少しお伝えしておきたいことがあります。これは、これからみなさんが社会に出て、社会的な責任を負いながら生きていくことになります。社会には様々なルールが存在していますよね。

ちなみに、サッカーのルールを紐解いてみますと、サッカーは元来から「紳士のスポーツ」と言われています。イギリスのパブリックスクールの対抗戦を行なう際にルールが必要になり、そこで、禁止事項を集めたものがルールの発祥となっています。前提としていることは「紳士たるものルールを守る」という基本原則でした。そして、もし違反したら「俺、違反した」と自分で申告していました。しかし、いくらジェントルマンでも、勝つためにずるいことや、相手を怪我させてしまうなど、なかなかルールを守らなくなりました。そこで、ルールに違反した場合は罰則を与えるということになりました。これが現在の「ルール」で、守るべきことと罰を与えることがセットになっています。そして、セルフジャッジにも限界があり、なかなか両者の折り合いがつかなくて、ゲームが進行できないことから、誰かに判断を委ねなくてはならなくなりました。これが「レフェリー」の誕生です。

「レフェリー」の語源は「refer」で、「委ねる」とか「任せる」という意味です。ですから、AチームとBチームの選手本人たちでは判断できないことを、第三者に決めてください、と委ねられた人が「レフェリー」です。レフェリーは事実を見極めて、「このようなことが起きました。では、こうしましょう」と導きます。その決められたことを受け入れるということが、ジャッジを含んだ「ルールを守る」ということの考えかたになります。

今の話しから気づいていただけたらありがたいことは「ルールを守るのは誰なのか？」ということですが。守るべきかどうかということは、すべて自分で決めているのです。もつとえば、自分で決められるのです。ですから、サッカー選手は、まず自分で判断できな

くてはいけない。我々審判がルールを守らせることはできないのです。選手が覚悟してルールを守らないのであれば、それは選手の責任であるということなのですね。

たとえば、信号が赤になりました。赤信号は道路を渡ってはいけないというルールです。でも、急いでいて渡らなければ間に合わないというときに、どうするかなんです。判断できるのは自分しかいません。他にも、学校で提出物の期限があって、それに間に合わせるか間に合わせないかは自分がコントロールできる。先生に守らされているわけではないですよ。

司会者：それは分かっているはずですよ。

では、サッカーの話に戻しますが、白熱してくると、反則を犯してでもその状況を止めたいというシーンというのがありますよね。

西村：あります、あります。チームの勝利のために、覚悟を持ってファールをするということも、もちろんあるでしょう。ですから、そのときは選手がなんでファールをしてまでその選手を止めなければならなかったのか。これは、その選手個人が悪いのではなく、チームとしてその状況になったことが原因です。選手には自分の行動に責任をもち、罰を受け入れることが求められています。

それから、このような経験ができたのでみなさんと共有しておきたいと思います。「ネイマール選手」彼はとても上手な選手であることはみなさんご存じの通りです。ドリブルが得意ですね。ネイマール選手とのロンドンオリンピックでのエピソードです。

ネイマール選手がファールされたんですけど、アドバンテージ（ファールを認めつつプレーを続けさせる）を採用しました。その後、「大丈夫だった？」と声かけたんです。すると、ニコッと笑ってくれて「大丈夫、大丈夫」と応えてくれました。それを見て相手選手はどう思うかという「ネイマール、強いなあ」と。相手選手としては意図してファールをして止めにいったのに、ファールに屈しない、さらに「大丈夫、大丈夫」という心の余裕を見せつけられる。こうなると、もうファールもできなくなっちゃうんですね。

司会者：ファールをされて、「何するんだ！」って怒っちゃう選手がいる一方で、ネイマールのように「大丈夫だよ」と事情を察知してもいるのか、余裕をもってプレーする選手もいるのですね。

西村：そうなんです。結局、人間性なんだと思います。

映像もありますので、見ながら確認してみましょう。これは、オールドトラッドフォードというマンチェスターユナイテッドのホームスタジアムでのロンドンオリンピックでの試合です。なかなか国際大会では使わない会場なので、とても貴重な体験でした。

さて、ネイマール選手はここでファールされたんですけど、ご覧のようにドリブルを続けました。笛を吹いてプレーを中断させることもできるのですが、このケースのように選手の特長を活かせるようなレフェリングをしていくことも大切です。すると、その選手がどんどんよい調子になっていきます。そういうところはすごく大切にしています。そして再びネイマール選手がボールをキープしました。相手選手は、先程はファールをしましたが、もう飛び込めない状況です。飛び込んでもファールすらできない。すでに「ネイマールうまいな」という心理的な勝負がついている状態です。この後、私はここで声をかけています。ネイマール選手は、サムアップで応えてくれています。「大丈夫、大丈夫」と。「倒れたら、ちゃんと吹いてね」みたいな感じです。彼の人間的な深さを感じますね、スケールが違うなと思いました。

司会者：こうして解説を聞いているとわかったように思いますが、本当に一瞬の出来事ですよね。そこで、吹くか吹かないか判断しているのですか？考えている暇はないように感じますが。

西村：そうですね。そんなに余裕をもって考えるというよりは、そのときの状況だったり、それまでのゲームの流れだったりというもので総合的に判断してパッと決めていきますね。

司会者：なるほど。そういうふうにして、審判を務められているという現場の雰囲気をお話いただきました。どのスポーツでもそうですけれど、当然、トップの選手たちが競い合っている競技、試合をしているわけですよね。それこそネイマール選手のような本当に世界の一流の選手がプレーをしていて攻撃と守備をしていて、相手選手の裏をかく駆け引きをしている。そのピッチの中で23人目として西村さんはその中央に立って、その攻守の激しさの中で翻弄されることってないですか？世界のトップレベルの選手が、そのまたトップ選手の裏をかいてボールを回し、走り込んでいるのに。審判は、そうしたプレーをベストポジションで見ないといけない。ある意味、ゲームの流れが俯瞰的に観られてないといけないと思うんです。こう言えるとすれば、ネイマールを超えたプレーの感覚がないと審判は務められないのではないかと、それくらいの疑問があります。審判の見えている世界とか、審判に求められている力はどのようなものか、聞かせてもらえますか。

西村：分かりました。まず、我々審判員は、戦術を理解し、戦術を感じながらどう動くのが大切です。そこからご説明したいと思います。

サッカーは、攻撃対攻撃のスポーツと考えています。サッカーは、相手のゴールに得点できなければ勝利はない。必ず点を取らなければならないスポーツです。チームは、最終的にはゴールしないといけないわけですから、日頃の練習もどうやってゴールを決めるのかということになります。ですから、我々審判員も、そのゴールをどうやって決めたいのか、たとえば、どちらかのチームがボールを奪った瞬間に、どうやってゴールを決めたいのかという戦術をすぐに予測しています。

司会者：目の前で起こっている状況から、次はこうなるだろうとイメージできるようにしているのですか？

西村：そうですね。実は、イメージだけでなくちゃんと練習もしています。

では映像を見ながら説明します。たとえば、2010年の南アフリカ大会では、ディフェンスとミッドフィルダーの間にある空間にうまいタイミングでボールが入ると、決定的なシーンを生み出すという戦術でした。とくに、スペインの戦術スタイルが有名で、空間をうまく使う、そのバランスがすばらしかったです。映像を観ていると、レフェリーが画面から消えるくらい一気にスピードが上がってしまう。この戦術を試合中にレフェリーは気づかなければならないのです。ディフェンスはいい中盤のラインを作っているんですけど、相手の空間に攻撃選手がパッと入ることによって、一気にスピードアップさせて、ゴールにつなげています。

次の映像では、このレフェリーに注目してください。レフェリーも分かっているものの、守備側選手と被ってしまいます。そこで、守備側の選手の邪魔をしないようにバックステップして空間を空けた瞬間に、その空間を攻撃に使われて、アッという間に画面から消えてしまいました。得点には至らなかったのですが、レフェリーも一瞬で振り切られてしまいます。

このように、試合中にどこにポジションを取れば何が見えるのか、ということを予測して動けるようになるために、映像を見直しながらトレーニングをしています。余裕を持って判断できる、よいポジショニングがとれるように予測をしています。



司会者：ディフェンスとかオフェンスの人たちがそこにいるとボールが奪えるという予見するような力と言いますか、本当にゲームを俯瞰的に捉える力というのが求められるというわけですね。

西村：はい。それをゲーム中に感じられるように、毎日練習しているんです。それではトレーニングの映像を見てみましょう。まず、スポーツビジョンのトレーニングです。近い物を見て遠い物を見ることを繰り返したり、自分の目を素早く動かす運動をしたり、後ろをパッと見た瞬間に誰がどこにいるかというのを記憶したり、それから、自分の中心視野外から来るボールに反応したりとか。視野にまつわるトレーニングをしています。

それから、耳を澄ませていただくと、ブブゼラの音、聞こえますか？ 2010年の南アフリカ大会では、ブブゼラの音が鳴り響く応援だったんですね。その状況を想定して、トレーニング施設の音響設備から毎日3時間最大音量のブブゼラの音が鳴り響く中で練習をしていました。そうすることで、ブブゼラがあることが当たり前となり、実際のゲームで影響を受けることなく集中できるようになりました。このように、準備はとても大切で、こういった準備をしながら実際のゲームでその成果を発揮するということでした。

再び戦術面に戻りますが、自分の周辺をたくさんのパスが回るのが2010年のトレンドだったんですね。ところが2014年のブラジル大会では戦術のトレンドが変わっています。たとえば、この映像をご覧ください。センターライン付近でボールが奪われました。奪った瞬間に何が起きるのか。2010年の戦術から劇的な変化を遂げていました。2010年では、パスをつながけながら攻撃していましたが、2014年では一気に逆サイドに展開してゴールまで攻めきります。4年でサッカーのトレンドが変わってしまいました。次のシーンです。

ここでボールが奪われました。この白チームの選手に注目してください。味方がボールを奪った瞬間に、ボールを見ないでトップスピードで前に出ます。戦術がスピードを用いて攻めきるスタイルに変わったんですね。2010年の空間をうまく作って、パスを交換するというようなリズムではなくなりました。レフェリーはこのような戦術をちゃんと理解していなければならないのですね。

次のシーンは、コーナーキックはどちらのチームにとっても最大の得点のチャンスということですが。コーナーキックではゴール前で混戦になります。このシーン、レフェリーは「接触がないか?」「大丈夫か?」と近寄ったら、ゴールキーパーが大きく最前線の味方へキックし、一気にフォワードが走り出しています。もはやとても追いつきません。何も起きないことを祈るのみですね。(笑)

このスピード感にどのくらい対応できるのかというのが、2014年のレフェリーに求められていたことです。このように戦術の変化に合わせてレフェリーも対策をとっていきます。

司会者：よくわかりました。審判は、担当するチームの戦術を理解し、ゲーム展開を想定しつつ、準備を怠らないのですね。

西村：そうですね。本当に2014年は、壮絶な準備をしていました。

この映像は、2014年のトレーニングの様子です。小さくて見えづらいかと思いますが、ここの赤いのが私です。ゴール前のポジショニングの練習をしています。ペナルティエリアの周辺というのは、やはり近くでいい角度で見ないと見極められないので、アジリティを駆使して追い回しています。この後、ゴールキーパーがボールをキャッチすると同時に、すぐに方向転換をして、ゴールキーパーがボールを蹴るよりも先に逆のゴールへスタートします。この大速攻に対応するために、この練習を毎日やっていました。

司会者：あらためて審判のすごさというのを感じますね。

西村：はい。ゴールキーパーがボールをキャッチします。そうしたらすぐにチームがどちらから攻めるのかを判断するために、受け手の選手の動きを見ます。ゴールキーパーから蹴られるボールで判断するのではなく、受け手の選手がどっちに動いたかで、右から攻めるのか、左から攻めるのか予測しています。

司会者：見ている方も、息が上がりそうです。いや、本当にすごいですね。初めてこういう裏の努力みたいところを垣間見ることができました。その他にもこんなこともしているんだよ、というものはありますか？

西村：そうですね、皆さんも一緒にやってみましょうか。もしかしたら知っている方もいらっしゃるかもしれませんが、その方は内緒にしておいてください。

これから白いチームと黒いチームが、バスケットボールでパスをするシーンを見てもらいます。見ているときは、ノーリアクションをお願いします。映像を見ながら、白いチームのパスの回数を数えてください。要領は大丈夫でしょうか？ぜひ、口に出さないで心の中で数えてください。集中力ですよ。では、始めます。

《映像》

はい。それでは、白いチームは何回パスをしていたでしょうか？その数だと思ったところで手を挙げてください。それでは、12回、13、14、手が上がり始めましたね。15、16、17、18回。18以上はもういらっしゃらない？

さあ、正解は、16回でした。

それでは、今の映像で、他に何か気づいた方はいらっしゃいますか？黒い何かは横切ったのですが、それが見えている方。

はい。ゴリラという声がありました。では、「ゴリラ」が横切ったのが見えた方はどれくらいいらっしゃいますか？

それでは、「ゴリラって何？」という方は？

大丈夫ですよ。「パスの回数を数えてください」と言ったのですから。

でも、ゴリラが見えた方にも拍手です。

さあ、もうちょっとうかがいたいのですが、この他にも変わっていることがあるのですが、気づいた方いらっしゃいませんか？

フロア：黒のチームの人数が減った。

西村：黒のチームの人数が減ったことに気づいている方？いらっしゃいますね。いいですね。さあ、16回、ゴリラ横切りました、黒い人数減りました。実はあともうひとつ変わっています。それを気づいた方？

フロア：カーテンの色が変わった。

西村：どんな感じでした？赤から黄色？そう、その通り。

もう一度見てみましょう。はい、カーテンの色は赤です。ゴリラが入ってきました。こんなにゆっくりと。今、カーテンの色が黄色に変わりました。最後に、黒いチームは二人になりました。

これは見える、見えないという「目」が原因ではありません。みなさんで同じものを見ていて、ゴリラが見えてはいるけれども、情報としてインプットしていないことがあるということです。我々の意思決定プロセスは、目からの情報を一番頼りにしているので、もう一度見直してみるとことで、その情報が正しいのかと考えてみることも大切です。想定したこと以外のことも「見える」かどうか、そして情報を分析する、さらには再確認して考えてみる。そんなトレーニングもしています。

「見る」ということにも色々種類があって、その質にとってもこだわっています。ゴリラが見えた方と見えなかった方がいらっしゃいましたが、どちらの方も目は大丈夫なのです。見直したらみなさんゴリラが見えましたよね。ということは、「目」では確認できていて、見えていたのです。でも、見えていたのですが、頭の中で処理しなかったんですね。

人は誰でも、見逃すということがあります。この原因は、そこにフォーカスが当たっていない、もしくはそこに気を止めなかったから見逃しているということなのです。これがレフェリーのミスの原因になっていることが多いので、「見る」という質にこだわって情報入力に気をつけています。

それともう一つ情報入力があります。「見る」というのは視覚、ということは、「聞く」というのは聴覚による情報入力ですね。「耳」から入ってくる情報にもこだわっています。たとえば、フォワードの選手が「裏」って一言言うわけですね。それを聞いたボールを保持している選手からパスが出てくるんですね。レフェリーが、もし見えていなくても「裏」ってという言葉で、「来る！」と気づかないといけない。レフェリーは、選手の仕草や声、監督の指示やジェスチャーから戦術を予測して判断に役立てています。

司会者：これは審判だけの能力じゃなくて、私たちにも同じことが言えそうですね。

西村：そうなんです。同じですね。たとえば、みなさんちょっと耳を澄ましてみてください。何か音、聞こえませんか？何の音が聞こえますか？中央にあるプロジェクターのファンの音が聞こえませんか？

この音は、今、スイッチ入れたわけではありません。こちらにみなさんがお集まりいただいた時から、ずっと聞こえていました。ですが、この講演では必要のない音なので、耳では聞こえているけど、頭の中で「必要のない音」としてカットしていたのですね。しかし、注意を向けると「聞こえてきた」ということです。耳には入っていますが、脳では「情報」として処理していません。よくある、「聞いていない」ということは、これが原因かもしれません。

司会者：そうですね。

さて、話を少し変えてみたいのですが、選手の話す言語は様々でしょうが、コミュニケーションはどのようなふうに行っているのですか？

西村：試合中は、ボディランゲージで対話をしています。

タッチアウトしたら、腕をどちらかに指せば、示された方向に攻めるチームのボールになります。レフェリーのシグナルですね。あらかじめルール付けされていて、サッカーを知っている方は誰もが知っています。このシグナルとジェスチャーを駆使しながら、レフェリーはコミュニケーションを取っています。



シグナル以外にも、ボディランゲージを用いてメッセージを発信していることがあります。これには、色々なポイントがあるのですが、たとえば、先生と向かい合って立ってみましょう。今、対面して話していますが、体の向きを変えてみるだけで何か雰囲気変わりませんか？距離感を変えてみても雰囲気が変わります。視線でも違ってきます。二人で並

んで同じところを見ながら話すことで、前向きに事を進めていきたいなっという雰囲気になります。

実際に、プレーヤーに注意しなければならないケースでは、スッと正対して「いいですか?」とするケースが多いです。でも、注意ではなく少し穏やかに「ちょっとこっちに歩きながら」と肩に手を添えながら同調して歩くことで、よいコミュニケーションをとっているなど、かなり印象が変わります。

「気持ちは分かるけど、ちょっと」という感じで接するべきか、毅然とした態度を取って接するべきか、コミュニケーションのとり方にすごく気を遣っています。位置取りと距離感は、とても大切なポイントですね。

もう少し詳しいところで、選手に受け入れてもらわなければならないときは、掌が下に向かっていています。たとえば、「待て」「ちょっと待って」とかは、手や掌を下に向けていますね。

指にも意味があります。日本人は人に指を向けるということはマナー的によくないので、指を使わなくなってしまったところがあります。でも、指を天に向けるだけで「注目!」と、ここにみなさんの注目が集めることができます。

レフェリーのシグナルに話を戻しましょう。スローインの指示を出す時に、腕を緩め示してみしましょう。するとなんか嫌な感じしませんか? 「その判定正しいの?」って言いたくなってしまいます。シグナルひとつで信頼関係に影響が出てしまうのですね。このようなコミュニケーションスキルを駆使して選手と会話をしています。

司会者：そういうことはFIFAでこういうふうにしましょうと申し合わせがあったりするのですか?

西村：「しましょう」というよりは、こういうことを理解してうまく活用しましょうということですね。

司会者：ボディランゲージのことで言えば、たとえば「おいで」と「そっち行って」の手の振り方は、振りはじめを見ていないとわからないとよく言われますよね。また、地域によっては手を下に振るか、上に振るか違うとも言われます。このように世界的な文化の違いで、戸惑われたり、意図を逆に取られたりしたことはないですか?

西村：そうなんです。文化の違いを正しく理解して、効果的な手の使い方を心がけていま

す。たとえば、選手の異議のジェスチャーで「ハイ、レフェリー」と両腕を広げながら示しているときは「ファールしたことは自分で分かっている、とりあえず言わせてほしい」という表現ですね。「絶対にファールをしていない！」というときには、もっと真剣な違うアクションで示してきます。

選手のジェスチャーや振る舞いから、レフェリーは選手の心理に気づかないといけません。一生懸命やっているけれど人間なので間違えることはあるので、それを選手のジェスチャーから理解して「もしかしたら間違いかもしれない、ごめんなさい」と認めることも大切です。それが間違っているのに「いや、自分が正しいから」と突っぱねると、人間関係がおかしくなってゲームコントロールはうまくいかなくなりますね。

司会者：いろんなコミュニケーションスキルがあるってことですよね。

さて、またお話を展開させてもらいたいのですが。ワールドカップレベルのところでの試合を裁いていく、国と国の代表をかける戦いみたいなところのピッチに立つ、それを裁いていかなければいけない、その難しさ、そういったところから見えてくる世界観というのを、何かお話し聞かせていただくことはできますか？

西村：そうですね。よく、テレビのキャッチフレーズで「プライドをかけた戦い」とか「負けれない戦いがここにある」という言い方がありますが、サッカーは「競技」です。なので、技の競い合いなんですね。ちょっとこのシーンをお見せしてみなさんと考えてみたいと思います。

《映像》

国と国との戦いと言いますが、その前に人対人でもあります。これは、ボールではなく完全に体がけて体当たりをしています。スローで見るとさらによくわかりますね。この結果、当たられた選手は骨折してしまいました。これをレフェリーは事前に止めることはできないんですね。先ほどの話でもありましたが、自分がどういうプレーをするのかということは、全部プレーヤーが決めることなので、レフェリーは事前に止めることができないのです。レフェリーが「そんなことしたらケガするからストップ、ストップ！」とはできないんですね。いくら国やプライドとか、様々なものを背負っていても、相手にケガをさせてしまうことは、サッカーが求めていることではない。サッカーに期待されていることではないのです。こうしたことは選手がお互いに心がけて、なくすことが大切なん

ですね。

次のシーンですが、先ほどとはちょっと違います。後方からすごいタックルが入りましたが、ブラジルのキャプテン、チアゴ・シウヴァ選手の態度を見てください。ファールをした彼は、チームメイトに何を言っているのかというと「おまえがあそこで抜かれたら、俺はここで行くしかないだろう」と言っています。チームとして「ここで止めなかったから失点されちゃうじゃないか」と怒っているんですね。ここからの彼の態度が重要です。レフェリーに対しては「分かった。すべて分かっている。大変申し訳ない」と、判定を受け入れ一切レフェリーには文句を言っていない。では、リプレーを見てみましょう。相手選手にどういう配慮をしているのか。彼は後ろからのタックルを仕掛けますが、相手をケガさせるようなタックルではないのです。もし、このタックルしている足が相手の足に直接当たっていたら、間違いなくレッドカードです。骨折する可能性もあると思います。ですが、彼のタックルは深く入っていますが、足を地面について相手に当てていないんですね。

チームの勝利に向けてここはタックルをしなくてはいけないけど、相手選手のケガに配慮したタックルを仕掛けている。この相手を大切に思う「リスペクト」はとっても大切なことで、これが様々なことを背負って戦う選手にとって必要な心構えだと思います。

キャッチフレーズでは、「負けられない戦いがここにある」と言うけれど、「戦っている」のではなくて「競い合っている」。スポーツにおいて、この部分を間違えないようにしなければいけないと思います。相手を倒すというよりは、技を磨いて競り勝つというのが「競技」の意味合いだと思います。

ちなみに、球技の試合は「球試合」。「タマシアイ」、「だましあい」と読むこともできます（笑）。チームでやる球技はほとんどが騙し合いです。悪いことをしているわけではありません。もっとふさわしい言い方をすると、相手の裏をかいて自分を有利にする技を磨いているんですね。

バレーボールなら、スパイクをストレートに打つと思わせてクロスに打ってポイントを取る。バスケットなら、シュートフェイントかけて相手飛ばしておいてタイミングをずらしてシュートする。このように、相手の裏をかいています。普通、世間で相手をだまして賞賛されることはまずないですよ。でも、ある意味これが球技の醍醐味だと思うんです。

先程の相手を傷つけるということは、ダメなのですね。アンフェアな行為の何が一番辛いのかというと、自分自身の評判を落としてしまうことですね。そのときはよくても「汚いやつだな」とか「ずるいやつだな」と一生言われてしまいます。たとえば、シミュレーションというファールをされたように装う行為をする選手も同じですね。レフェリーをう

まくだましてPKをもらえた。でも、後々「ずるいやつだな」となりますね。一生、「俺はずるい人です」というレッテルを抱えながら生きていかなければいけない可能性がある。本当にそうすべきなのかどうなのかというのは、自分自身が決めることなのです。スポーツ選手に求められていることは、やはり「誠意ある行動」や「すばらしい心構え」とか「人間力」。ここを高めていけるように、プレーヤーの方にはぜひ魅力ある人間になって、多くの方のあこがれの存在になってほしいと思います。

司会者：そうですね。

さて、せっかく、西村さんの生の声を聞ける機会でもありますし、フロアの人たちからの質問、質疑応答の時間を作りたいと思います。質疑応答なんて言いますと、ちょっと堅苦しくなってしまうんですけど、せっかくだから西村さんに話を聞きたいなんていう人いませんか？

質問者1：札幌ジュニアに入っている菅井と言います。選手目線として聞きたいんですけど、僕たちのチームは個人としてもチームとしても試合前に戦うスイッチを入れることができません。ブラジル代表やほかの強豪チームがどうやって試合前のスイッチを入れるのか教えてもらいたいです。



西村：すごい質問考えているね。じゃ、自分が考えるスイッチってどういうこと？

質問者1：競技をするための闘争心みたいな。「戦うぞ」っていう気持ちに切り替える。

西村：なるほど。いつも練習をしているよね。その練習って、相手と「戦う」練習をしている？それとも自分の技術を発揮しようとして練習している？

質問者1：自分の技術を発揮してチームを勝利に。

西村：なるほど。じゃ、最初のスイッチの入れ方が「戦うぞ」っていうスイッチは練習してないよね、日頃。そうすると入らないよね、やはり。「いつも通り、自分が練習してきたことをやるぞ」と思ったらできそうな気がしない？

質問者1：できそうな気がします。

西村：そっちだね。日頃準備をしていることをやるぞってスイッチを入れるといいんじゃないかな？戦うという練習、相手を倒すというよりは、自分たちの練習してきたことを発揮してゴールにつなげるという練習しているんだよね。そういうふうにはスイッチを入れたらいいんじゃない？それをみんなで協力して。

質問者1：ありがとうございます。

西村：頑張っ。

質問者2：札幌大学4年の森木です。今、ワールドカップの最終予選とかやっていて、アジア予選、アジアカップなどがあります。どうしても日本だけ応援する気持ちが強くて、だから主観的に見てしまう部分があるかもしれません。けれども、たとえば中東とかで試合をやるときに、中東のレフェリーのジャッジがおかしいなっていう感じる部分が最近多いです。西村さんから見て、中東のレフェリーはどう評価されますか？

西村：ありがとうございます。

サッカーは、いろんな地域で違うんですね。先ほどの話の流れからすると、私たちのサッカーって正々堂々と戦うことがとても美しくもあり、それを目指してやっています。それよりもずるいことをしてでも自分が有利になることを優先する文化のサッカーもあるかもしれません。私たちJリーグのレフェリーは正々堂々さをちゃんと見極めるレフェリーです。逆に、中東のレフェリーは「ずるさ」などを間違わないようにしようとしていますか

ら、かなり厳しいジャッジをします。

それぞれの地域のサッカーが違うので、たとえば、ヨーロッパだったら「あんなのファールにならないなあ」くらいの激しさでお互いにやっています。そうすると選手は、そのサッカーのスタイルに対応していく。南米だとシミュレーションが多いけれど、それを見抜く力が南米ではとても高いとか。それぞれの地域のサッカーに応じてレフェリーは違うんですね。ということで、中東のレフェリーが来て、日本のサッカーの審判をすると、なんか合わないなということは当たり前になります。サッカー観が違うことが理由だと思います。

日本のサッカーに合わないレフェリーもいれば、合うレフェリーもいます。たとえば、ヨーロッパのレフェリーは、日本のサッカーにすごく合いますね。それは、ヨーロッパのサッカーにとっても近い形で、日本のサッカーが頑張ろうとしているからなんです。ということで、それぞれの地域のレフェリングのスタイルの特長もありますし、対戦相手のサッカースタイルもあると思います。

つい最近の代表戦で、日本のサッカー文化では「ずるいなこの時間稼ぎ」とイライラしたと言われたものがありました。しかし、その国では当たりの駆け引きなんですね。その国では「そんなのでイライラしないよ」と観ているわけです。

これは、時間に正確な日本の文化が影響しています。たとえば、札幌駅から新千歳空港に「何時の電車に乗れば何分に着く」ということが当たり前になっていませんか？でも、それは日本だけですからね。電車が時間通りに来ない国のほうが多いです。日本は電車が数分遅れただけで、遅延証明書が出ますよね。それを持って、間に合う時間に乗っていたけど、遅れたのは電車のせいだって証明してくれます。このようなサービスは日本だけです。日本は、みんなが気持ちよく生きられるように整い過ぎている国でもあるので、時間の遅延に関しては過剰にイライラする可能性があるように思いますね。

サッカーは全世界でやっていますから、かなりアバウトなところはアバウトです。そのギャップというのは日本が一番苦労しているところです。選手もたぶん苦労するし、それを見ているみなさんも日頃のレフェリングとのギャップに苦労する。でもこれが当たり前と思うと落ち着きませんか。

これが、他国のレフェリングがおかしいなと思う理由だと思います。「おまえらのサッカーずるいぞ」と思いつつ、こっちもそれに対応すればいいという、「順応する力」が日本に求められる対応力かもしれないですね。

とてもおもしろいところに気づかれていますね。ありがとうございました。

司会者：他にないですか？

質問者3：えっと、ネイマールが骨折したのはいつ治ったんですか。

西村：はい、ありがとうございます。

僕ね、ネイマールのドクターじゃないから分からないです。ただ、今、元気にプレーしているんですね。ということは、ケガをしても必ずドクターの人と一緒に努力をして、またピッチに立てるようにネイマール選手が努力した結果です。ただ治っただけではピッチには立てないです。ケガをしてもちゃんと治して、しっかりトレーニングをして、そしてピッチに戻る。ということは、ネイマール選手自身が頑張っているんですね。いつ、治ったかではなくて、彼が治るまで努力をしたということに気づいた方がいいと思います。君も、これからケガをするかもしれない。でも、ケガをしたら「もう辞めた」というふうにあきらめないで、ケガをしてからどれだけ強くなって戻ってくるかということを、考えてもらえたらいいと思います。

質問者4：今までレフェリーされてきて、人間的に懐が深い選手みたいな人はいましたか？

西村：たとえば、先程から出ているネイマール選手は懐が深いです。それから、チームのキャプテンになるような選手は、やはりサッカーのことをよく分かっています。ぜひ、みなさんにお伝えしたいんですけども、みなさんが見ている有名選手というのは、ピッチ上ではかなり文句言っているように見えているかもしれませんが、各国のトップリーグやワールドカップのピッチに立てるような選手というのは、日頃どれだけの努力をして、どれだけ自分を節制し、そして選ばれし者となりピッチに立っているかということです。もともと悪い人なんかいないんです。すべての選手が素晴らしい人間性を持っています。

「懐深い選手は誰か？」ということですが、みんな懐深いですね。ただ、ゲームの状況で急に頭にきたり、興奮したりします。そういった選手をどうやって通常に戻すかということがレフェリーに求められている役目なんですね。何で怒っているのかという「怒り」の原因を探ります。もしかしたら、私の判定かもしれない。もしかしたら、相手の態度かもしれない。もしかしたら、自分へのふがいなさかもしれない。「怒り」の原因をしっかり探って、そこにアプローチしていく。まだ怒りが収まらないようだったら、少し冷静になる時間を取っています。レフェリーは、選手の心理をマネジメントすることも任務のひとつです。

ゲームを進めていくと、選手の懐深さに感心することがあります。うまくいなくてもあきらめずにチャレンジし続ける。そんな選手の姿勢に感動しますね。ありがとうございます

ます。

司会者：それでは、最後にみなさんへメッセージを頂戴できますか。

西村：はい。私は、夢と感動を支える立場でJリーグのピッチに立っています。その中で一番感じたことをみなさんにお伝えしたいと思います。

たとえば、みなさんそれぞれ目指していること、夢に感じていること、目標としていること、もしそれが見つかっているのであれば、とにかく「夢中」になってください。そうすると必ずいろんな事があっても、乗り越えられると思います。嫌なことがあったり、失敗したりするでしょうけれども、夢中なら乗り越えられることがたくさんあると思うので、ぜひ、夢中になってください。みなさんの年代が一番夢中になれる、打ち込めるときだと思うので、ぜひそこは、一生懸命頑張っていたいただきたいなと思っています。

まだ、夢がほやけている人、夢が見つかっていない人はいらっしゃいますか？夢や目標が、なかなか見つからない人もいると思います。でも大丈夫です。ちなみに私、みなさんの年代の頃に、レフェリーやろうとは思ってなかったです。夢って突然現れたりしますし、巡り合わせで急に出てきたりします。「あれ？これなんかやっておもしろいな」というのが夢に変わったりするかもしれません。だから、夢が見つかってないといっても慌てることはないと思います。変な夢をつかむよりはじっくり考えて「よし、これをやろう」と思えるときを待ってもいいでしょう。

ちなみに、みなさんの周りには必ず応援してくれる人がいます。その人の期待に応えるということは、ちょっとした夢をかなえることになります。応援してくれる人がうれしいと思うこと、喜んでもらえること、これってあんまり意識しないで育っているかもしれないけど、誰かに喜んでもらえるということは、その人の夢がかなったということに置き換えられる事がたくさんあります。

応援してくれる人と一緒に「これ喜んでもらえるんだったら、もう1回やってみよう」なんてことが自分の夢に変わることがあるかもしれません。私は、試合中に「西村さんありがとう」とか、試合が終わった後に「西村さん、今日は本当に助かりました」と選手にかけてもらった言葉が、「何か役に立てたかもしれないな」と思えて、ずっと今までレフェリーを続けています。彼らがどんどん夢をかなえていくのを見てると、「こういうサポートもいいな」と思って自分のやるべき目標になりました。

今日は、いろんなお話しをさせていただいたのですが、「準備」はやはり大切なので、ぜひ、よい準備をしていただけたらと思います。それから、何のために準備しているのかという、

準備の目的がすり替わらないようにしてほしいと思います。準備を整えることに一生懸命になって、準備で満足してしまう。それではよい準備にはなりません。準備を整えて「さあ勝負!」と、本来挑むべきことに向かってください。

それから、プレッシャーに弱い方はいらっしゃいますか? ちなみに、プレッシャーの原因は「不安」です。なんで不安になるかという、自分の準備不足が理由です。準備不足の不安がプレッシャーに変わり、やれることすら真っ白になって力を発揮できなくなる。ちなみに、プレッシャーは自分で作っているの、自分でコントロールできるんです。ここまでではできるけど、ここからはできない。だから過剰な期待はしない。と考えることで、プレッシャーにはなりません。もちろん、できないこともあるけど、頑張って準備したことはちゃんとできる。自分で自分を追い込み過ぎないようにして、プレッシャーをうまくコントロールしてください。



そして、前向きにチャレンジすること。なぜ大切かという、いい準備をしていたら、あとは前向きなチャレンジをしてチャンスをつかんでほしいと思います。準備不足で、かつ、チャレンジしなければ、チャンスがあっても目の前を通り過ぎるだけなので、ぜひチャレンジをしてください。

チャレンジはすべてうまくいくわけではありません。もちろんうまくいかないこともあります。でも、チャレンジしなくて「やっとならばよかったなあ」「あそこでなぜチャレンジしなかったんだろう」と後悔するケースもありますね。結局、チャレンジしてもうまくいかないかもしれないし、チャレンジをしなかったら絶対にうまくいかない。どっちもうまくいかないリスクがあるんだったら、やはりチャレンジした方がいいですよ。

チャレンジした失敗は問題ありません。大切なことはチャレンジしてうまくいかなかった後にどうするのか。もし、うまくいかなかったとしても、それを繰り返さなければいいのです。前向きにチャレンジしてうまくいかなかったら、繰り返さないようにいい改善策を打てばいいのです。失敗は乗り越えると忘れます。忘れたということは、身についた証拠です。たくさん失敗している人は、失敗した分だけ成長しているということ。失敗が多い人ほどチャレンジしていることになります。ぜひ前向きなチャレンジでたくさん失敗してください。

そして、相手を大切に思う「リスペクト」という言葉を、みなさんの心の中にとどめておいていただけたらと思っています。人対人として、お互いを大切に思う、思いやる。「リスペクト」が何よりも大切にすべき心構えだと思います。

最後に、そうしたリスペクト映像を見て終わりにしたいと思います。

《以下、映像を見ながらのコメント》

ワールドカップで、試合前の国歌で感極まるネイマール選手ですね。ブラジルのみなさんの国歌への思いがとても素敵でした。握手でお互いをリスペクトする選手たち。監督同士も試合前に、お互い正々堂々と戦おうとリスペクトしています。

レフェリーたちも、心をひとつに合わせて。日頃の成果をここに出します。

コイントスのときに私が両チームにかける言葉は「お互いをリスペクトすることを忘れないでください」と言っています。そして、「レフェリーも仲間に入れてくれるとありがたい」と言ったら、「もちろんだよ」と笑ってくれます。

ひとつのボールが多くの人を幸せにしてくれる。みなさん、触っていただけました？このボールが多くの人に幸せや感動を届けてくれます。どんなに世の中、悲しいことがあってもサッカーを見ているときは幸せになれる、そんなパワーがサッカーに秘められていると思います。

敵、味方、関係なく、困っている人に手をさしのべることができる。これ、リスペクトがなければできません。我々の日常の中にもリスペクトを表すチャンスはたくさんあるはずです。電車の中で席を譲るなんてことは、相手のことを大切に思っているからできること。なかなか恥ずかしがり屋の日本人が表現することは難しいですが、ぜひみなさんでリスペクトあふれる日常にしてもらったらいなと願っています。

歴史的な大勝したドイツのチームのサポーターです。とっても大喜びですね。それに対して、大敗をしてしまったブラジルのサポーターです。号泣です。この喜びも悔しい涙も含

めて感動です。サッカーを通じてみなさんを幸せにすることができる。試合終了して、勝敗に関係なく、お互いをリスペクトすることができる。選手、監督、レフェリー、サポーター、お互いの立場を超えてリスペクトする。これがサッカーの素晴らしさですよ。

ぜひ「リスペクト」を、今日はお持ち帰りいただきたいですね。

司会者：そうですね。西村さん、長い時間にわたり、貴重なお話をしていただきありがとうございます。ありがとうございます。

審判からの「世界観」をいろいろな角度からお話ししていただきました。これからサッカーの試合を見る目も変わってきますね。

それでは、これを持ちまして、本日の講演を終了いたします。皆様、ご清聴ありがとうございました。